

待望の出版、印南航太作『ラージャ』

『君主論』により、「目的のためには手段を選ばぬ」権謀術数家とされた中世フィレンツェの政治家マキャベリ。しかし、マキャベリをして、その足下にも及ばぬとマックス・ヴェーバーに評させしめたのが、本書『ラージャ』の主人公カウティリヤである。聞きしに勝るその理論は、カウティリヤの書『アルタ＝シャーストラ 実利論』（『カウティリヤ 実利論—古代インドの帝王学』上下 上村勝彦訳 岩波書店 1984）で知ることができる。その内容については最後に触れることとして、はじめに、この稀代の人物とその思想に果敢に挑み、本シリーズを世に示そうとする印南航太氏の勇気と才能、そして本書のコミックとしての出現を、大きな拍手をもって迎えたい。

『ラージャ』は、どのような時代、どのような社会を背景としていたのか。

『ラージャ』の主人公カウティリヤは、紀元前 300 年頃の北インドを舞台に、本書のもうひとりの中心人物となるチャンドラグプタと共に、インド亜大陸全域を支配する初の帝国であるマウリヤ帝国の礎を築いた実在の人物である。

西方からインド亜大陸西部のパンジャーブ地域に移動してきたアーリヤ人は、紀元前 1000 年頃から 600 年頃にかけてさらに東へと移動し、その結果、ガンジス川中・下流域がインド世界の中心となった。農産物や鉱物資源など、豊かな生産力を誇るこの地域には、16 大国と総称される国々が生まれ、互いに覇を競う戦国時代の様相が生じた。その中から頭角を現して覇権を握ったのがマガダ国であり、そのマガダ国を倒して帝国の基礎をつくったのが、カウティリヤとチャンドラグプタであった（後者が王、前者が宰相となる）。

中国の春秋戦国時代は、孔子にはじまり、老子、荘子などの理論家が登場し、また、儒教、道教などの諸宗教が競い合う諸子百家の時代として知られている。当時のインドもまた、仏教やジャイナ教はもとより、道徳否定者、修行無用論者、唯物論者、不可知論者、相対論者等々、多くの宗教、哲学者がしのぎを削った時代であった。そのような状況を生んだ背景は、都市経済の発展によって商人などが台頭し、バラモンが奉じる旧来の形式張ったヴェーダ祭式や、バラモンを最上位と主張するヴァルナ思想を否定する自由な気運が蔓延していたことである。加えて、群雄割拠の政治状況が、生きていくための強い心のよりどころを求めさせたからであろうと私は考えている。

カウティリヤとチャンドラグプタが打倒を目指したマガダ国は、それ自体、厳しい来歴をもつ国家であった。16 大国は、部族の紐帯が強い部族共和制の国々と王が専制支配する国々からなっていたが、戦国時代を通じて、前者が後者に駆逐されていく。マガダ国は、後者の代表的な存在である。ラージャグリハ（王

舎城)を都とした(後に、現パトナのパータリプトラに移る)この国は、ビンビサーラ、アジャータシャトルの父子二代の時代に、部族の絆を断ち切る専制国家へと脱皮した。そして、コーサラ国をはじめとする国々を次々に征服し、その支配を確立した。しかし、それは、ビンビサーラが息子のアジャータシャトルに幽閉されて殺され、アジャータシャトルが息子に殺されるという、骨肉相食む権力争いの結果である。

マガダ国の王は、いずれも、バラモンを頂点と考えるヴァルナ制度にこだわらず、バラモンや祭式の権威よりも、実力=軍事力を力の源泉とした。ビンビサーラの時代には、仏教やジャイナ教など、旧来のヴェーダ祭式主義を否定する宗教が生まれたが、それらの王はこれらの新宗教の活動のために積極的に寄進している。既成の体制、価値観を覆す気風がみなぎる社会だったのだ。「下賤な家系」が出自とされたマガダの王にとって、『マヌ法典』にありありと表現されているバラモン上位の思想など、邪魔なもの以外ではない。

マガダ国は、前四世紀半ばにはガンジス川全域を支配したが、それを可能にしたのは象、騎馬、戦車、歩兵からなる強大な軍事力であった。その脅威は、インドスを渡河し、インドの中心部に侵攻しようとしたアレクサンドロス率いるギリシア軍にさらなる進軍を思いとどまらせ、バビロンに撤退させるほどであった。ちなみに、このアレクサンドロスに、若き Chandragupta が面会し、統一国家実現への大きな刺激を受けたという興味深い逸話も残されている。

この強大なマガダ国を、本書の主人公カウティリヤと Chandragupta が手を携えて倒し、マウリヤ朝が築かれた。かれらがどのような戦略と機知でマガダを倒し、マウリヤ帝国の建設に成功したのかは、印南航太氏の歴史解釈の見せ場であり、わくわくさせられる最大の見所であろう。

この二人は、それぞれバラモンとクシャトリヤの出身である。卑しい出自とされるナンダ朝の打倒は、彼らが代表する貴族層の巻き返しであったとの解釈もある。

マガダ国を倒すことに成功した二人は、その後、アレクサンドロスの遠征によってインド北西部に残っていたギリシア勢力を一掃する。続いて、シリアからのセレウコス朝の軍と講和し、アフガニスタンの東側を得、さらにはインド南部のデカン地方に進んでその地を征服した。こうして、インド史上初の亜大陸全体に及ぶ帝国であるマウリヤ帝国が築かれた。そしてこの帝国は、Chandragupta の孫にあたる有名なアショーカの時代に、最大の領土を誇ることになる。

領土拡大への動きは、アショーカによる武力からダルマ(法)による政治への方向転換で終止符が打たれた。仏教の影響を強く受けたアショーカが、帝国最大の版図を築く途次、カリンガ国征服の戦いで、数十万人という膨大な数の死

者を出したことを悔いたからであるとされる。もちろん、そのような甘い政策がこの時代に通用するはずはない。アショーカは、晩年王子や大臣達に幽閉され、苦悩のうちに死んだ。マウリヤ帝国自体も、アショーカの死後 50 年ほどで滅亡することになる。

『アルタ＝シャーストラ 実利論』が発見されたのは、20 世紀の初頭である。その書が現存する形でまとめられた時期については、同書の訳者である故上村勝彦東京大学教授は、紀元前 2 世紀から紀元後 2 世紀までであろうと推測している。また、文体や用語の一貫性からして、一人の作者によるものであることは確かであるが、それがカウティリヤであったかについては確証がないとしている。真偽は確かめようがない。しかし、この書に描かれているような政治論、統治術策の論者と、インド亜大陸全体の統一国家を建設するという偉業を成し遂げた中心人物のカウティリヤが結びつけられることは不思議ではない。

『アルタ＝シャーストラ 実利論』の内容は、スパイの任命、王子への警戒、官吏の任務と監督、司法、人々の監視、刑罰と処刑、敵国との外交、出征時の危険への対処、軍営の設置、城砦の攻略法をはじめ、多種多様である。そこでの論で貫かれているのは、王による徹底した実利の探求と実践が、秩序を維持し、国民の安寧をもたらすために必須であるという信念である。その書の一部を以下に紹介しよう。

父王から冷遇されている王子は、どのように行動すべきか。まず、父王に命じられたことを、熱意を持って遂行せよ。その果実は、父の元に届けよ。それでも父が満足せず、他の王子達を優遇するようであれば、森へ行くことを願い出て、隣国の王、すなわち、父王の敵に庇護を求めよ。そこで実力を蓄え、林住族の長と関係を結び、有力者の娘を娶り、そして、父の王国の不満分子を味方につけよ。単独で動くのであれば、黄金を製造する作業場で働き、盗め。異教徒の教団の財産や神殿の財産、富裕な寡婦の財産を奪え。隊商や船の積み荷をしびれ薬を用いて略奪せよ。役者や医師、嘶家に変装して王の急所につけ込み、武器と毒で王を殺害せよ。そして皆に告げよ、「私はあの不遇の王子である。この国は皆で享受すべきであり、一人のものではない。私を支持するものには、二倍の食料と俸給をもって酬いるぞ」と。

では、このような不遇の王子が父王の元にやってきたならば、父王はどのように対処すべきなのか。自分の死後には王国を譲ると言って懐柔せよ。なおも反抗するようであれば、一人息子であれば幽閉せよ。他にも息子がいるのであれば・・・殺せ！

カウティリヤが、チャンドラグプタと共に、その権謀術数をもって誰を味方につけ、どのような戦略を用い、敵と、そして我々読者を欺きながら帝国建設を導くのか、今後の展開に目を離せない。